

# 大学での社会福祉士養成におけるコミュニケーションスキル獲得手法の分析

## An analysis of a method of learning communication skills in certified social worker training course

坂本 毅啓<sup>\*1</sup>, 佐藤 貴之<sup>\*1</sup>  
 Takeharu Sakamoto<sup>\*1</sup>, Takayuki Sato<sup>\*1</sup>  
<sup>\*1</sup>北九州市立大学  
<sup>\*1</sup>The University of Kitakyushu  
 E-mail: s-takeharu@kitakyu-u.ac.jp

あらまし：福祉教育における ICT 活用に関する研究は、医療・看護分野とは異なり研究がほとんど行われていない。本研究では、大学の社会福祉士養成教育に焦点を絞り、そこで用いられている教育手法、教材を分析することで、ICT 活用の可能性を探る。

キーワード：福祉，社会福祉士養成教育，コミュニケーションスキル，ICT 活用

### 1. はじめに

福祉・介護ニーズの高度化・多様化，サービス提供主体の多様化，施設収容保護型サービスから地域を基盤とした総合的かつ包括的サービスへの移行など，今日における福祉人材，特に社会福祉士に求められる質はこれまでにない高度なものである。

福祉人材の質を向上させるために，既に介護人材養成の在り方検討会が，介護福祉士養成教育（介護職員等実務者研修）において従来の通信教育に加えてインターネットを利用した教育を検討すべきであることを示している一方で，ICT 活用に関する研究は，ブログを活用した教育支援が数例ある程度である<sup>(1・2)</sup>。このような背景を踏まえ，坂本・佐藤は介護福祉教育や社会福祉教育での ICT 活用の検討を行ってきた。

本稿では，大学における社会福祉士養成教育におけるコミュニケーションスキル，特に基本的面接技術の習得に焦点を当て，教育方法，教材の分析を通して，ICT 活用に向けた考察を行う。

### 2. 大学における社会福祉士養成教育

#### 2.1 大学における社会福祉士養成カリキュラム

社会福祉士とは，主に福祉ニーズを持った人に対して，直接的，間接的に関わりながら支援を行う専門職であり，国家試験を合格することで取得することができる国家資格である。大学における社会福祉士国家試験受験資格の取得には，表 1 で示した領域の指定科目を履修して卒業することが必要である。

表 1 社会福祉士養成教育のカリキュラム

領域	時間数	
人・社会・生活と福祉の理解に関する知識と方法	180時間	
総合的かつ包括的な相談援助の理念と方法に関する知識と技術	180時間	
地域福祉の基盤と開発に関する知識と技術	120時間	
サービスに関する知識	300時間	
実習・演習	相談援助演習	150時間
	相談援助実習指導	90時間
	相談援助実習	180時間
合計	1,200時間	

この中で，実践的な学びを中心とした実習・演習科目は「相談援助演習」（150 時間），相談援助実習指導（90 時間），相談援助実習（180 時間）の合計 420 時間となっている。

#### 2.2 相談援助演習の教育内容

相談援助演習は，個別指導並びに集団指導を通して，具体的な援助場面を想定した実技指導（ロールプレイング等）を中心とする演習形態により行うことになっている<sup>(3)</sup>。

教育に含むべき事項のうち，基本的コミュニケーション技術の獲得と基本的面接技術の習得は，コミュニケーションスキルの獲得が必要とされる領域である。これらは図 1 に示したような位置関係にあり，相談援助演習においてコミュニケーションスキルを高めることは専門的な実践力を養うために重要な役割を担う。実際の授業では，「日常的なコミュニケーションから専門的コミュニケーションのレベルまでの段階的に組み立てて展開」される<sup>(4)</sup>。

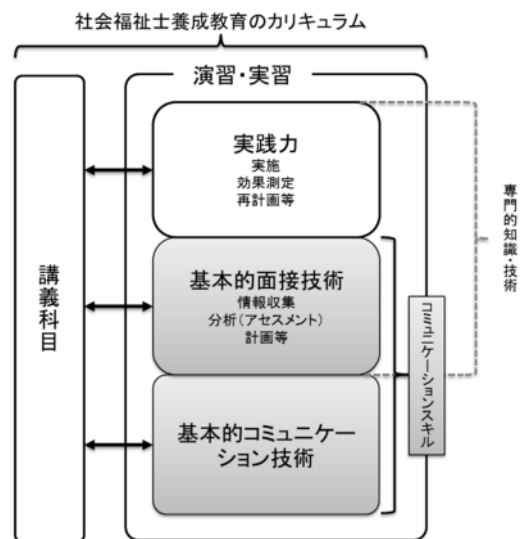


図 1 コミュニケーションスキルの位置づけ

### 2.3 コミュニケーションスキル獲得における課題

コミュニケーションスキルを獲得する従来の教育方法の課題点としては3点挙げられる。1点目は「相談援助演習」では、グループで学ぶことを前提としており、全く同じワークを何回も繰り返した練習ができないことである。2点目は、授業前提としての関連知識の理解度に極端な差が見られるため、学びの質の確保において不十分な場合もあることである。集団力動によってある程度の平準化はなされるが、ロールプレイ時のパートナーの理解度に影響を受けることもあり、1回限りのグループワークを通じた学びをより良くしていくには解決すべき重要な課題である。関連知識を学ぶ講義と演習を接続することが難しいことも課題克服を困難にしている原因である。3点目は、コミュニケーションスキルが現場での実習（相談援助実習）を終えた時点でも十分に獲得しているとは言い難いことである。図1にもある通り、コミュニケーションスキルがある程度獲得されていないと、実習において必要な学びが得られず、より専門的な面接技術や実践力は乏しくなる。

### 3. 演習教材の概要と分析

本稿では、大学の社会福祉士養成課程でよく利用されている演習教材<sup>(5)</sup>に掲載されている、面接技術を学ぶ模擬面接演習教材を取り上げる。この教材における位置づけは図2に示す。

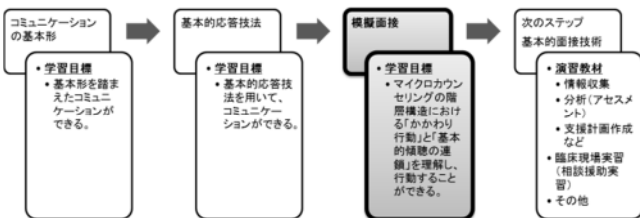


図2 模擬面接演習教材の位置付け

この教材では、まず2人組に分かれる。そして、自由話題設定に基づいてシナリオを作成し、他の学習者の前で実際に模擬面接を行う。他の学習者はその模擬面接を観察し、ワークシートに基づいて面接におけるコミュニケーションの基本形、及び基本的応答技法ができているかチェックをする。このワークシートは、模擬面接実施者に渡される。全ての学習者は、この一連の流れを体験する。

この教材を稲垣らが現場の教師のために示した分析手法<sup>(6)</sup>に基づいて、教材の分析を試みる。まず、この教材での学習目標は、マイクロカウンセリングの階層構造の「かかわり行動」と「基本的傾聴の連鎖」を理解し、行動できることにある。(図3参照)

この教材で学ぶための前提条件として、学生には①基本的コミュニケーション技術、②マイクロカウンセリングの基礎、③事例を含めた福祉ニーズ、④相談援助の技術体系、⑤近年の社会動向、⑥社会福



図3 マイクロカウンセリングの階層構造<sup>(7)</sup>

祉士としての倫理綱領、ということ全てを知っていることが最低限求められる。

これらのことから、前提条件①から⑥は全て知識として理解していること、すなわち、ガニエの学習成果の5分類における言語情報に分類されるのに対し、この演習後の学習目標は、実際に共感的傾聴等ができることとなる運動技能、適切な質問を選ぶ等ができる知的技能、社会福祉士としての価値を具体化するような態度に分類される。

### 4. おわりに

本稿では、大学の社会福祉士養成課程における相談援助演習の中で基本的面接技術に対し、演習に参加する学生に必要な前提条件と学習目標の具体化を試みた。今後は、この学習目標と前提条件をもとに課題をより詳細に分析し、評価の観点・方法と教育の設計と共に ICT 導入の具体的な場面を提案する。

### 参考文献

- (1) 古瀬徹, 井上登記子: “介護福祉士養成教育への IT 利用 ~教材としての介護現場からのブログ~”, 第20回日本介護福祉学会大会, 発表報告要旨集 (2012)
- (2) 井上登記子, 古瀬徹: “介護福祉士養成教育への IT 利用 ~介護現場から見た学生の意識~”, 第20回日本介護福祉学会大会, 発表報告要旨集 (2012)
- (3) 文部科学省高等学校教育局長・厚生労働省社会・援護局長通知: “大学等において開講する社会福祉に関する科目の確認に係る指針”, 19文科高第917号, 厚生労働省社援発第0328003号 (2008)
- (4) 社団法人日本社会福祉士養成校協会編: “相談援助演習 教員テキスト”, 中央法規出版, 東京 (2009)
- (5) 山辺朗子: “ワークブック社会福祉援助技術演習② 個人とのソーシャルワーク”, ミネルヴァ書房, 京都 (2003)
- (6) 稲垣忠, 鈴木克明: “教師のためのインストラクショナルデザイン 授業設計マニュアル”, 北大路書房, 京都 (2011)
- (7) 福原真知子: “マイクロ技法の階層”, 日本マイクロカウンセリング学会 HP (<http://www.microcounseling.com/hierarchy.html>), (2013.06.17 時点)